

「そこの男子生徒！ カガミ君、止まりなさい！」

「……うん？」

小走りに廊下を進んでいた時に突然そんな声をかけられた『この学校の男子生徒』、カガミは、ぴたりと立ち止まると、その声のほうに顔を向けた。

その声の主は、眼鏡をかけた、小柄な女子生徒だった。

カガミはその顔を見て小さく首を傾げ、記憶を手繰る。

(あれは、確か……)

今の自分の『学友』、クラスメイトというものの一人だった、はずだ。

彼は記憶を手繰ってみたが、名前は思い出せなかった。

まあ、ごく一時的な滞在者でしかない身としては、仮初の同級生の名前などをいちいちすべて覚えてはられないのは当然のことだ。

そんな彼をよそに、彼女はつつかとカガミのほうへ歩いてくると、彼の数歩手前で足を止め、仁王立ちになる。

その顔が何やら怒った風な様子なので、カガミは、はて、と首を傾げた。

「ええと、なにか？」

「なにか、じゃありません。廊下は走ってはいけないことは、知っているでしょう？」

「……ああ」

彼は目をしばたたかせると、数瞬遅れて頷いた。

「確かに。そうだったね」

知っているというか、言われて思い出したのだ。

(「校則」ってやつか。めんどくさいなあ。時代や場所によっていろいろとルールがあるのは当たり前だけどさ)

その女子生徒、石動真矢（いするぎ・まや）は、不機嫌そうに彼を睨む。

「そうです。ここは公共の場であり、他の生徒の迷惑になるような行為は厳に慎むべきです。それに、君のそのシャツ、第一ボタンが外れていますよ。きちんと留めてください」

黒縁の眼鏡の奥にある瞳は、校則違反者への非難の色を隠そうともしていない。

「それから、そのポケットからはみ出ているものは何ですか？まさか、校則で禁止されているような物品ではないでしょうね？」

真矢は鋭くそう言って、カガミの制服の胸ポケットからわずかに覗いている、金属質な何かを指さした。

まるで尋問官かなにかのようだ。

それを受けて、カガミは軽く肩をすくめた。

（めんどくさい子だなあ……）

しかし、こうして近くでよく見てみると、なかなかの美人でもある。

これも何かの縁だよ、と、カガミは内心でほくそ笑んだ。

旅先の現地女性と仲を深めるといふか、ちょっとした関係をもってお楽しみというの、悪くない。

「はいはい。ポケットの中のものを出してもいいんだけどね。でも、ちょっと廊下で出すようなものではないかも……」

カガミはそう言うと、とりあえずボタンを留め直した。

「廊下で出せないもの……？ それはどういう意味ですか。校則に違反するようなものでないのなら、今ここで見せられない理由はありませんよね？」

真矢はそんなカガミの言葉に、眉をひそめる。

その言い方が、まるで何かやましい物を持っていると自白しているように聞こえたからだ。

だが、カガミが素直にボタンを留めたことで、少しだけ警戒を緩める。

「……わかりました。どうしてもここでは見せられないというのなら、生徒指導室まで来てください。そこで話を聞かせてもらいますから！」

真矢は有無を言わせぬ口調でそう告げると、カガミの腕を掴もうと一歩踏み出した。

その小さな体軀から、有無を言わせぬ圧力を放っている。

少しでも怪しいと判断すれば、即座に教師に突き出すつもりなのだ。

「ああ、構わないよ」

カガミは素直に腕をつかませてその感触を堪能しながら、導かれるままに生徒指導室へ向かった。

そこに他に誰もいないといいんだけど、と思いながら。

もっとも誰かいたならいたで、多少の面倒の代わりに楽しみが増えるかもしれないな、という思いもあったが。

幸か不幸か、生徒指導室には誰の姿もなかった。

がらんとした部屋には、長机とパイプ椅子がいくつか並んでいるだけだ。

真矢は部屋の中ほどで足を止めると、ようやくカガミの腕を解放する。

「さあ、ポケットの中の物を見せてください。言い訳やごまかしは通用しませんからね！」

彼女はカガミの正面に立ち、両腕を組んで鋭い視線を突き刺

した。

本人は真剣そのもので違反者を威圧しているつもりなのだろうが、その様子は少々滑稽でもある。

「はいはい。校則に基づく取り調べ、というやつだね？」

旅の先々で目にする物珍しい文化風俗を実際に体験してみる機会ということもあって、カガミはむしろ楽しそうに頷きながら、ポケットの中身を取り出していく。

とりあえず三つほどの品が、机に並んだ。

「こ、これは……」

真矢の目は、彼が机の上に並べた奇妙な品々に釘付けになる。

中には、何か妙な形をしたサインペンと消しゴムのようなもののセットとか、一見したところ、別に問題のなさそうなものもある。

だが多くは、おおよそ普通の男子学生が学校に持ち込みそうなものではなかった。

何種類かの、見たことのない植物の種らしきものが入った小袋。

きれいな球形をした、ピンポン玉ほどの大きさの透き通ったガラス玉のようなもの。

小さな噴霧器がついている、高級な香水かなにかのように見える小瓶。

まあそのくらいまでは、まだ奇妙だというだけでいいとしても。

中に一つ、一見しただけでも明らかな危険物があった。

それはスタンガンのような電極が先端についた、スマートフォンほどの大きさの機械だったのだ。

「君はどれについて、説明を受けたいかな？」

カガミは彼女の驚きなどどこ吹く風で、のんびりとそう尋ねた。

真矢が我に返って、きつとした顔になる。

「……これは、何ですか。ふざけているのですか？ 特にその……スタンガンのようなものは、どう見ても学校に持ち込んでいいものではありません！ 銃刀法に触れる可能性すらあります。今すぐに、すべて正直に説明しなさい。事と次第によっては先生方に報告した後で、警察に通報されることもありえると思います！」

そう言う彼女の声は、わずかに震えている。

目の前の男子生徒はただ悪ふざけをしているだけなのか、それとも本当に危険な人物なのか。

もしかしたら、すぐに逃げ出したほうがいいのかもしい。

だが、ここがすぐ近くに大勢の教師や生徒がいる校舎内であるという事実と、風紀委員としての責任感とが、彼女を強気にさせた。

一歩も引かずにカガミを睨みつけ、説明を要求する。

「ああ。スタンガンだなんて、そんな原始的なものじゃないよ」

カガミは彼女の言葉に動じた様子もなく、楽しそうな様子そのままだ。

「説明するけど、ぜんぶ一度にわけにもいかないよね？ 最初にどれの説明を受けたいのか、選んでくれないかな？」

「なっ……！」

カガミの不遜な態度に、真矢の堪忍袋の緒が切れかかってい

た。

まるで自分に今日遊ぶおもちゃを選ばせようとでもいうかのごとき口ぶりに侮辱されたと感じ、怒りがこみ上げる。

彼女はいらいらと、眼鏡の位置を指で直した。

「ふざけるのも大概にきなさい。君は自分の立場が分かっているのですか？ ……よろしい。それなら、君のいいようにしましょう。その、一番危険そうに見えるものから説明してもらいます！」

強い口調でそう言うと、スタンガンに酷似した道具を指さした。

これが子供のおもちゃなどではないことは、その金属の鈍い光沢と、素人目にも分かる複雑な機構から明らかだった。

彼女の声には、隠しきれない敵意と緊張が滲んでいる。

「言い訳は聞きませんよ。それが何で、どうして学校に持ち込んだのか。一つ残らず、正直に話さない。君の答え次第では、今すぐに、本当に警察を呼びますからね！」

「そうか。いい選択だと思うよ」

カガミは相変わらずの平然とした様子で、にっこりと笑ってそれを手に取る。

「これは、スタンガンのような武器とは違うんだ。ほら、ここにタブレットのような画面があるでしょう。スタンガンにはこんなものはない」

それから、その道具をひっくり返したり、指差したりしながら、のんびりと説明を始めた。

「使い方はまず、こうしてね——」

彼が手を滑らせると、画面が起動する。

そのまま、使い方を見せるという態で操作を続け、その道具

……『簡易型人体改造機』に、改造項目の設定を打ち込んでいった。

「……？ さっきから、何をしているのですか？」

画面をのぞき込んだ真矢は、怪訝そうに眉をひそめた。

カガミが打ち込んでいる文章の表示は、現代の日本人には読むことができないのだ。

それはアルファベットに似た文字の、意味のない羅列に見える。

ただ、冗談や悪戯にしては手が込み過ぎている奇妙な装置を操作し続ける彼に言い知れない不気味さを感じ、不安が増していく一方だった。

「……カガミ君！ いい加減に、意味の分からないことは……！」

耐えきれなくなった彼女が抗議の声をあげようとした、ちょうどその時。

「……ああ。ちょっとこれの準備には時間がかかるんで」

カガミはふと顔をあげてそう言うと、無造作に、机に置かれた透明な球体のほうに空いた手を伸ばした。

「先に、こっちの方も実演しておこうかな」

彼がそれを手に取ると、カチッという、スイッチの入ったような音がする。

同時に、そのピンポン玉ほどの大きさの球体の内部に星屑を散りばめたような無数の光が生じて、ちかちかと明滅を始めた。

「えっ？」

そちらに注意を引かれた真矢によく見えるように、カガミはもう片方の手で機械の操作を続けながら、その球体を少し掲げ

てみせる。

「これ、ただのガラス玉じゃなくて、内部に仕掛けがあるんだよ。ほら、きれいだろう？ よく見てほしいな……」

「きれい？ 何を馬鹿なことを。私はそんなもので、誤魔化され……」

真矢はそう言いかけて、ふと言葉を途切れさせる。

「……あ——」

本当に、すごくきれいだ。

一度注意を向けでじっと見てみると、その不思議な光から、目が離せなくなる。

それはまるで、小さな銀河が小球の中で瞬いているかのようだった。

規則的でありながら、どこか予測のつかない光のリズムが、彼女の意識をゆっくりと、しかし確実に引きずり込んでいく。

何かおかしい、目を離そうという思考がほんのかすかに浮かんだが、すぐに霧散する。

眼鏡の奥の瞳が焦点を失って、霞がかったようになる。

「————」

「……これでよし、と」

彼女が完全に光の明滅に意識を奪われたのを確認すると、カガミはその球体……『催眠クリスタル』を稼働させたまま、机の上に置いておいた。

それから、改造機の方の設定を終えるのに集中する。

《改造対象者は、自身が改造実行者の所有物であり、指示されたことには一切の疑問を持たずに従うのが最優先の義務であると認識する》

体験版はここまでです。

続きは製品版で！